

子解析だけでなく、分類学の基礎である体構造や、胞子体形成過程の詳細にも関心を持ってくれる研究者が輩出すること

を強く希うものである。

(東邦大学 吉崎 誠)

日本微生物生態学会 教育研究部会 編著

微生物ってなに？ —もっと知ろう！身近な生命—

国立大学や国立研究所の独立行政法人化など学術研究を巡る環境が激変している。このような中で、今後とも健全な研究活動を推進し続けるためには、納税者たる国民からの理解と支持を得る必要がある。それには、「研究の面白さ」を国民が理解できる言葉で語り、彼らの知的好奇心を刺激することにより学問知を大切に育む環境を整えることが、研究者の使命の一つと思われる。とくに次世代を担う若者には、様々な機会を通じて自然科学への関心を高め、その素養を培っていくことが望まれる。しかし、近年の学術研究は、専門分野の細分化などにより、一般人にとって大変分かり難いものとなっているのが現状であろう。

本書は日本微生物生態学会教育研究部会が若い人たちをターゲットに広く微生物に興味を持ってもらう目的で企画したものである。ここには、微生物学の歴史、その基礎から最新のトピックスが盛り込まれ、生きた学問としての微生物学の魅力があちこちに散りばめられている。

本書は224ページ、6つの章から構成されている。第1章「地球の生い立ちと生命の歴史」では、地球の誕生から生命の歴史を概説し、共生や感染症を例に微生物と地球の共進化について述べられている。ここでは、地球の誕生からその基盤を支えてきたのは微生物であり、それ抜きに現在の地球とそこに生息する数多の生物の繁栄はあり得ないことが実感させられる。第2章「微生物学の歴史」では、その発展に貢献したレーベンフック、パスツールやコッホなどの偉業を紹介するとともに、現代では分子生物学の導入によって、基礎、応用両面で微生物学が大きく発展していることが説明されている。第3章「微生物の種類」では、藻類も含む主要な微生物の分類と特性がまとめられ、微生物がいかに多様な生物群から構成されているかが理解できる。第4章「地球環境の微生物たち」では、炭素、窒素など物質循環における微生物の役割に始まり、高温、低温など極限環境に生きる微生物を例示し、それらの研究が地球外



日科技連出版社、
A5判、224頁、
2006年10月、
定価2,100円
(税込)、ISBN
4-8171-9194-5

生命の探求に繋がる可能性を語っている。第5章「役に立つ微生物たち」では、食品、薬剤、各種産業（農林水産業、工業）や環境修復に役立つ微生物が紹介されており、微生物が生態系の一員であるのみならず、人間生活に深く関わっていることをあらためて認識させられる。第6章「バイオ研究の課題」では、遺伝子組換え等の最先端技術が生物多様性など生態系に与える影響や、人間による環境変化が病原微生物の台頭を招く危険性を指摘し、それらの問題に対処するためには、生態系をより深く理解することが重要であることを訴えている。なお、本文中には、生物学の基礎が「豆知識」や「コラム」として掲載され、理解を深めるのに役立つ。また、口絵には美しい顕微鏡写真も配置され、生物造形の妙を実感させられる。

本書は微生物に関心のある人、これから微生物を知ろうとする人のみならず、自然科学の教育者にとっても格好の入門書といえる。本書を読んでいると、中学生時代に『微生物の狩人』という本に出会った記憶が思い出される。今にして思えば、それに書かれた微生物学の先達への憧れが今の職を選んだきっかけになったのかも知れない。本書『微生物ってなに？』が若い人たちの微生物学を志す道標になることを期待したい。

(独立行政法人 水産総合研究センター 山口峰生)



堀・堀著「総覧・日本の巨樹イチョウ」 イチョウは藻類に非ずということで当誌では取り上げていませんでしたが、2005年12月に内田老鶴圃から標記の本が出版されています (ISBN 4-7536-4096-5)。著者の堀 輝三先生 (元会長、写真は同書カバーより) は、54巻2号の宮村先生による追悼文にありますように、翌2006年2月に逝去されたため、これが最後の著作となってしまいました。「藻類」の編集委員統投をお願いした際、編集側には所属名に「銀杏科学研究所」を使うことに躊躇いがありました、「イチョウの精子は藻類だと僕は思っている」の言葉に感動し、54巻1号表紙裏のように掲載した次第です。共著者の奥様 志保美さんも同年10月に亡くなられ、寂しい限りです。合掌(編)

